

心奥探訪

「幸せを追い求め、もがいた男が抱いた『志』」

まだまだ暑さの残る9月の初め、小走りに駆け寄る影が一つ。

「すみません、お待たせしました。」

柔らかくも凜とした笑顔。

彼と出会ったのはもう1年以上前のこと。

今でも強く記憶に残る言葉がある。

「やるやらないは別として、今の仲間がいたらロケットも打ち上げられると思ってます。」

可能性を感じているという話ではない。

もう既に可能性などは通り越して確信しているのだ。

仲間たちと創っていく未来を。

なぜそこまでの想いを抱いたのか？

何が彼を掻き立たせていたのか？

そして、彼の何に惹かれて人が集（つど）ってきたのか。

そこには彼が抱く一つの志があった。

彼が生まれたのは長崎のとある島。

父方、母方共に何代も続く家系ということもあり、愛されると同時にある意味厳しくも育てられた。

「負けたらあかん」「なんでも一番を取りなさい」

祖母の優しさと厳しさの愛だった。

そんな想いを受けてか2歳の頃から始めた水泳では地域でもトップクラス、今でも記録が残っているという。

成績も上位をキープし、少年時代には学級委員長にも推薦で選ばれた。

その流れで中学受験を経て中高一貫に入学。

しかし中学時代は一転して不良グループとして日々を送っていたという。

ワルに憧れて色んな悪さをしたと語る表情は少し気恥ずかしそうに見える。

そんな表情から語られる当時の話は、今の彼からはあまり想像できない。

高校に入ると今度は部活動に熱中していった。

軟式テニス部だった彼は土日は誰よりも早く着き、仲の良かった友人と自主練の日々。

根性論ではなく本質を突いた意見をすることで上級生に問題児されながらも

圧倒的な結果で黙らせてきた。

その一方で休み時間には小説を読み漁る。

数々の違う表情を見せる彼だが、今と繋がる彼の片鱗が垣間見えたのが

体育祭で起きた一つの出来事だった。

実行委員長を担った体育祭だったが雨によって午後からの演目が中止。

先生たちの計らいで別日に仕切り直されることとなった。

「これはチャンスや！」

先生に内緒で各チーム長に呼びかけ、体育祭終盤で先生たちへ感謝を伝えるというサプライズを計画。

大成功を収めた。

当手を振り返る表情はまるで今計画を思いついた時のように楽しそうだ。

これだけ聞くとただの成功談のように思える。

しかし当時の彼が抱いていた想いは全く違ったものだった。

「危機感というか怖かったんですよ。このまま行くと何も無い。普通以下になってはいけない」

『一番になりなさい』という教えが、ある意味で彼を縛っていた。

自分の存在価値を保つためには結果が必要だったのだ。

そんな不安を隠しながら大学卒業後、選んだのは金融業。

入社当初はどうやって一番になるか考えていたが、お客を潰すような営業スタイルに
ほどなく嫌気がさしたという。

「もう諦めですよ、社会とはこういうもんやと。未来に希望なんて感じなかったですよ」

そんな中、彼にとって一つの転機となることが起こる。

突然の母の死

当時を振り返っても、記憶を消そうとしていたのかその瞬間は覚えていないという。色んな感情がごちゃ混ぜになり、泣くことが出来たのは全てが終わった後だった。

それが後押し的一端にもなり、個人でのFP活動をスタート。

月収400万を突破し寝る間も惜しんで動き続けたという。

『いいやん、やること見つかって、良かったね』

妻にも後押しを受けその後独立。

証券会社時代に比べ希望を感じた世界。

しかし、そこも「お金」こそが全ての世界だった。

自分の存在価値を守るため普通を捨てた学生時代。

人を不幸にするようなことが仕事なんだと教えられた証券時代。

お金こそが結局、力を持つことを知らされたFP時代。

そうして30歳を過ぎた頃、この業界にいたら自分のやりたいことも見つからないと感じ、当時のFP仲間と「**事業をつくる**」ということを始めた。

これこそが今の活動の原点となる形だった。

思い描いたものを創っていく。

アイデアや発想を丸々活かせられることに楽しさを感じた。

それはまるでありし日の体育祭を彷彿とさせる。

手を変え、形を変え、色んなものを試していく中でたどり着いたのが「内観」

思想、哲学を大切にしている人たちとの出会いで、心のことそして両輪となるビジネスのことを
どんどん吸収していった。

「思考、思想、哲学、ここが整わん限りはお金を稼ぐって言っても大したお金にならん」

これまでのスポーツ、勉強、仕事、ある意味全て「数字」で結果をーそして価値をあらわすことが出来るものから、
誰かと比べることが出来ないものに重きを置いた。

ここでの学びが今までの価値観を覆した瞬間だった。

今の彼を構成する大切な価値観を手に入れたと同時に一つの別れが彼に訪れた。

共に事業を作ってきたFP仲間と方向性の違いが顕著に表れ始めたのだ。

このままズルズル一緒にいてもお互いに意味がない。

離れるのは嫌だ。

そんな想いもどこかにありながら、袂を分つ決断を下した。

当時、主宰していた塾の生徒や顧問一人一人に想いを伝えた結果、

多くのメンバーが彼の元へ残ることとなった。

その後、偶然の出会いの重なりから右腕となる存在の加入も経て、今彼が運営する塾となっている。

彼が仲間を大切にしている理由が、ただ心に重きを置いているからだけではないだろう。

袂を分かったことで彼に押し寄せた不安と葛藤、そして無価値観。

色んな恐怖と戦う中で、彼を信じ残った人たち。

彼の想いに賛同し、力になると手を取った人たち。

今の彼が恐怖に負けず、全てを受け止め、今笑って「楽しい」と言えるのは彼らの存在が大きいように思う。

「幸せを夢見てしんどいことをし続ける人があまりにも多いように思ってた」

彼が塾を通して伝えたいこと。

それこそが「自分で自分を幸せにする方法」

世の中の人全員これが出来れば、一瞬で世界中が幸せになれる。

そう、至ってシンプルなのだ、しかしだからこそ壁は高くまだまだ厚い。

決まった答えもなく、誰かに教えてもらえるものでもない。

自分で見つけ、自分でやらなければならない。

しかし不可能ではない。

そんなことを伝え、たった一人と向き合っていく。

彼が抱く志に達するその日まで、今日も仲間たちと想いを馳せながら。

「あなたは何者で、どんな人ですか？」